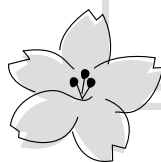


中学年編

「安心と刺激」を意識して



関西学院初等部 教諭
野村真一



期待と不安の入り混じる春。そこに必要なのは「安心と刺激」です。

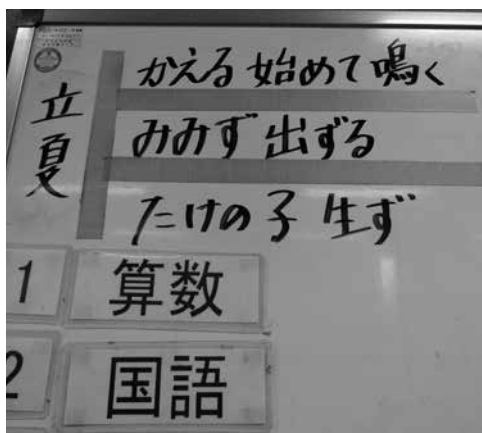
国語では、子どもたちが豊かに関わり合う中で深い読みに達します。どんな意見を口にしても聞き合えるクラスであるかどうかは、「安心」を得るために大切な要素でしょう。聞く・聞かれる場を日常的に設定し、できるだけ多くの体験ができるようにしています。

また、曖昧なままでは終わらない国語であることも大切です。読みの観点や用語など、国語としての学習内容が確かに習得されていくことで、そこに「安心」が生まれます。

そしてときどき、いつもとは違う「刺激的な取り組みが挿入される。子どもたちはそんな国語の時間を求めているのではないのでしょうか。ここでは、私が最近の学級びらきで実践している方法をご紹介します。

二十四節気七十二候

子どもたちには言葉に敏感であってほしいと願っています。一年を二十四等分した「二十四節気」と、さらにそれらを三等分し時候を表した「七十二候」を、教室正面



▲教室内のホワイトボード

漢字博士

新出漢字一字につき一人の担当者を決めます。毎日二人ずつが前に出てきてその漢字の解説を行います。その際、デジタル教科書の漢字コンテンツを利用して視覚化を図ります。制限時間は一分。漢字ドリルには載っていない情報を発信します。語源や

のホワイトボードの片隅に書くようにしています。年間を通して更新し続け、さまざまな言葉に出会わせます。先人の知恵とは見事なもので、季節の節目を本当によく捉えていることが伝わり、感嘆の声が上がることもしばしばです。子どもたちにとって花鳥風月の句を捉える力は、人生を豊かに生きる糧となるでしょう。この毎日の積み重ねは、後に述べる俳句の季語の学習にも直結します。

詩の朗読

四月の最初に、音読用の詩集（担任による百選）を配布します。それぞれの詩には通し番号が付けてあります。番号が大きくなるにつれて難易度が上がっていき、特に八十番台以降は、内容を解釈するのが難しいものもあります。しかし、あえてそれを選択する子どもも多く、背伸び感覚が魅力の一つになっているようです。そして、この詩集を用いて「詩のバトル」をします。「バトル」というと少々物騒ですが、子どもたちが大好きなイベントです。

者は、〇〇さん」とコールをしながら勝者の腕を持ち上げるといふ形式です。これが思いのほか白熱するのです。ジャッジする子どもたちからは、音読者に対して温かくも鋭い感想・批評が述べられます。こうした営みが子どもに安心を生みます。自分の頑張りに対して仲間が関心をもってくれるという安心感です。私の役目は、負けたほうのよさにも光を当て、次への意欲をもたせることです。何巡目かになると組み合わせ抽選が大きな盛り上がりを見せ始めます。自然と読みの練習をしたくなる学習です。



▶【発表例】「孫」の語源「子の子へと一筋につながる糸」を、デジタル教科書のペンツールを用いて示しました。

ルールはシンプルです。あらかじめ対戦相手をつくじで決めて、一日一組ずつ対戦していきます。二人が順に詩を朗読し、どちらの読み方がよく工夫されていたか、クラス全員がジャッジします。審判役の子ども（日直当番）は全員のハンドサインをざっと見渡して判断し、「勝



▲審判役の子どもがハンドサインを見渡しているところ

句会

子どもたちは句会が大好きです。たまに開くと大喜び。四月の早い時期に一度体験すると病みつきになること請け合いです。ルールはシンプル。「投句↓清記↓選句↓披露」の順で進みます。まずは「投句」。自分の句を短冊に書いて提出します。次に

「清記」。シャッフルして配り直された短冊を、新しい短冊に書き写します。この時点で、誰がどの句を書いたのか分からなくなります。そして「選句」。清記された句の前に並べて、通し番号を付けます。そして各自、よいと思う句を選びます。私のクラスでは一人二句ずつ選ぶことにしています。最後は「披露」。最も多くの点を集めた句



▲「選句」の様子

読み聞かせ

から順に、何がよかったのかを話し合います。ひととおり意見が出たところで「誰の句ですか」と問いかけます。たいてい皆うれしさと照れの混じる表情で手を挙げてくれます。句会のよいところは、誰が書いたのか分からない中で句を評価するところです。日頃の人間関係抜きに褒め言葉が飛び交うので、言われる側の喜びは格別です。

読み聞かせは、六年生になっても必要です。中学年ならばなおさらです。クラスを落ち着かせるためだったり、奮い立たせることをねらったりと目的はさまざまです。私は、途中で止めながら少しずつ子どもとの対話をはさむ「聞き手参加型の読み聞かせ」をよく行います。国語の既習事項を自然と確認できるように意識することもあります。学んだことの活用を子どもとともに実感する。そうした経験の積み重ねは、国語の学習への信頼を生むでしょう。学級びらきから、年間を通して、学びが積み重なるようデザインしたいものです。